

故郷へ帰宅日 昭和二十二年十二月三日午後四時ころ
帰宅場所 本籍地奈良県吉野郡十津川村大字神下三七

三番地

復員後の生活

①職 業 昭和二十三年、和歌山県日高郡美浜町

大和紡績に入社

昭和二十四年五月、視力障害で退社、元の山林業に復帰

②休 業 昭和三十三年、山仕事中の事故のため背

柱捻挫、恥骨々折

③入 学、卒業 昭和三十四年奈良県立盲字校に入學、

昭和三十六年三月卒業、「あんま、マッ

サージ」修業免許取得

④開 業 昭和三十六年五月 三重県南牟婁郡紀和

町板屋

⑤転 居 昭和四十二年、現住地である神宮市神倉

二丁目一―二十一に移住、現在に至る

⑥健康状況 昭和四十九年九月より五十九年六月ま

で腎ネフローゼ、闘病生活十年、昭和六

十一年より快方に向かい、現状維持する
も、最近腿鞘炎の症状、激痛に苦しんで
おられる。

(和歌山県 橋本 義治)

抑 留 記

鳥取県 井上 万吉男

平壤三合里に集結

昭和二十年八月末日、教育隊の倉庫から被服、糧秣
等が配給になり、一人用天幕を急造してリュックサッ
クとし、詰め込めるだけ詰めて背負い、三合里に向け
て出発した。我が家への土産にもなるだろうと思うと、
重いのも苦労はなかった。夕闇迫るころ辛うじて三合
里に到着した。入口にはソ連兵が大きな声で騒いでい
る。なんのことかと思いついて見ればリュックサッ
クの点検である。折角担いだ荷物をほとんど没収され、
苦労の第一歩が始まった。

狭い盆地に約三万人の日本兵が收容された様子、我々幹部候補生は天幕生活だったが、後に馬小屋に移動、馬一頭のねぐら奥行三メートル・幅二メートルの場所に一個班十五人が起居した。常識では考えられない広さである。寝るときは七人と八人に分かれ、交互に足を入れ合い横向きで重なり合うさまは、なんとも言えない格好だ。夜中に用便に行き、帰ってみれば一寸の隙間もない。仕方がないので、元いた場所に寝ている同僚の上に横たわっていると、疲れも手伝いいつの間にか眠ってしまう。朝になって目が覚めてみると、元の姿に割り込んでいるのだった。

日中は炊事用の薪取りの使役に出た。伐採した木を一本ずつ担いで帰るが、なにしろ三万人の炊事をまかなう薪の量は実に莫大なもので、付近の山々を見る間にハゲ山にしてしまった。野放しになった軍馬の群れは、草を求めて次第に奥山の方へ行き、そのうちに厳寒の中で次々と野たれ死にしていまい、何とも哀れであった。我々もこの馬たちのような運命をたどるのはなかるうかと思うと、不安は一層つのるばかりであっ

た。

しかしその反面、気分的にやけ糞になると同時に、物事に対する怖さがなくなり無鉄砲な行動が多くなってきた。若い我々は粥ばかりすすっておれと言われてもそうはいかない。なんとか工夫はないものかと考えたのが糧秣のかっぱらいである。糧秣の配給は各大隊ごとで、雨模様の時や夕暮れの配給時をねらい、他の大隊に紛れ込み、その大隊の配給分を担いで帰り、仲間と分け合い満腹感を味わった。

一方、三合里の人口付近には日本兵から没収した糧秣が山積みされ、周囲は鉄条網が張っており、ソ連兵が銃を持って警戒していた。照明もあり、そこに忍び込むことは至難の業である。二人一組になりしばらく様子を見ながら寸時の勝負、万が一、見つければ一発で終わりだ。そうこうしているうちに、乾パン一箱抜き取りに成功した。命がけの仕事である。ソ連兵が感付いたかどうかは知らないが、翌日荷物の検査があった。幕舎の中に穴を掘って隠し、その上に座り込んで検査を受けたときには、何とも言えないつらさだった。

そのころ、配給米の少なさを皮肉り「朝夕に粟とキビとの粥ばかり、二合足らずの三合里かな」と詠んだ方がいた。夕暮れになると遥か彼方の星を眺めながら故郷のことを思い、だれとはなしに口伝えに伝わっていた三合里哀歌を口ずさみ、歌いながら故郷を想い浮かべていた。

空っ風の強いある日、突然にダモイ出発の命令が出た。「それ」と、厩の囲いをしていた戸板をはずし、錠を下ろして、出発準備よしと待ち構えていたところ、夕方になり間違いだたとの通報、一同がっかりして、壊した戸板を修理したが、応急修理のため寒さが厳しく、一晩中震えあがった。前述した「かっぱらい」のお返しと思い我慢した。

煙草の配給はほとんどなく、節約しながら吸いつないでいたが、ついに品切れとなり道端に生えている「ヨモギ」の葉を乾燥させ、新聞紙で巻いて吸った。

またナツメの木でマドロスパイプを作り、茶やヨモギの茎葉を混ぜ、これを燻らせて一時しのぎをした。煙草欲しさに現地人と物々交換した。こちらは石鹼を持

ち出し煙草との交換もソ連兵の監視の間隙をぬっての早業で一苦勞した。

水虫との出会い

三合里に集結して以来、風呂に入ることはほとんどなく、不潔な日々であった。潜在していたであろう水虫が急に蔓延し軍靴が履けなくなった。他の体は丈夫であるにもかかわらず作業に出れない。同僚にも申し訳ない気持ちで困った挙げ句、上司に相談したところ、「炊事なら下駄履きでできるしやってみよ」と言われて、言下に「やります」と答えた。そのときは自信はなかったが、思えば專業農家であった我が家では農繁期になれば近所の方々に手伝いに来ていただいていた。十数人の賄いを担当していたのが祖母で、小学生のころから炊事の手伝いをし小遣いをもらっていた。経験をしたというものではないが、なんとなくやれそうな気がした。しかし、配給の食糧は粟、稗、高粱、大豆粕などで、およそ口にしたこともない、人間の食べ物ではない、調理の方法も考えられない。大変なことになったと内心弱気になった。以来丸三年、ソ連の

使役に出ることなく炊事に精通した。炊事のことについては後述する。

石湯温泉

「ヤボンスキーダモイ」とはソ連兵の口癖で欺瞞である。それが分かっているながら若干の望みをかけ、もしかしたら帰国できるのではないかと編成に参加し、トラックに乗り込んだ。平壤駅と思い込んでいたのに山の中にどんどん進み、着いた所が石湯温泉という伐採作業の現場である。

松を主に雑木を伐採し、貨車積みにする作業であるが、小生は前述したように炊事班長を命ぜられ百名程度の給食を担当した。川床の静かな場所に竈^{かまど}を築くため周辺の石を探し二人で担ぎながら据付けたのはよかったけど、片棒を担いでくれた鈴木候補生は重労働の無理がたたり、マラリアに罹り苦勞をかけたことは忘れられない。作業場の近くを、朝鮮鉄道が通っており、北上する貨車の窓から手を振る日本兵たちを複雑な気持ちで見送った。石湯温泉の作業は付近の山林を丸裸にして数カ月で終わった。

シベリアへ強制送還

終戦から一年間、北朝鮮で様々な作業に従事した日本兵はおそらく最後であろう。ソ連に連行されたであろう他の部隊の情報が入らない。いよいよ移動命令が出た。もしかすれば帰国できるかもしれないとの望みを抱き平壤駅に集結した。護衛のソ連兵はあくまでもダモイ東京を連発し、欺瞞も徹底していた。平壤駅に待ち構えていたのはシラミ消毒をする車両と貨車である。一瞬にして長期輸送が予想された。貨車は四方に小さい窓があるだけで、むんむんとし、風通しも悪い、辛うじて横寝ができた。こうなれば、どうにでもなれと思い、ふてくされながらごろごろしていた。

数日間もかかりソ満国境らしい所に着いた。下車命令で嚴重警戒のもと徒歩で何日間かかり国境を越えた。

途中、道ばたにうずくまっている同僚を見掛けたものの、我が身が保たれない状態ではどうにもならず失礼したことは心残りであった。また、方々に馬も倒れており無惨この上ない情景で先が思いやられ胸がいた

んだ。

ウラジオストックの初夜

数日間の行軍で着いた所はウラジオストックと聞かされ、旅の疲れを癒すこともできず夕食の準備に取り掛かることにした。炊事班員の募集から手掛けた。約千人余りと聞き、三十人の炊事員をにわか作りで編成した。ソ連から釜と食糧の配給があつたが肝心の燃料がない。しばらく待ち係員に督促するが、「待て」と言うだけで一向にらちがあかない。午後四時を過ぎても配給の気配がない。五時過ぎの夕食に間に合わない。意を決して薪のかつ払いに出た。三十人総出である。見渡せどそれらしい物がない。ウラジオストックは漁港があるのに気づき魚箱を狙った。一人五箱ずつ担ぎ、百五十箱の燃料でどうか夕食を炊くことができた。まだ配給の薪は届かない。定刻に夕食ができてよかったと自己満足をしていた矢先、ソ連兵がやって来た。カップライのことであろう、一言二言言いながら有無を言わさず営倉まで連行された。将校らしいソ連兵より詰問があり、有りのままを報告した。彼いわく、

「燃料は必ず配給する、それまで待たねばならない」とのこと。小生は「日本人は三食とも時間勵行にしなければならぬ。夕食の時間に間に合わないのやむを得ず、悪いとは知りつつ魚箱をカップライした」と弁解した。将校は重ねていわく「ソ連は個人の物を盗むのは構わないけど公の物を盗めば重罪だ」と言い、これ以上問答無用とばかり無灯の鉄牢獄に押し込まれた。これで弱冠二十一歳の生涯は終わりの思い、一睡もすることなく走馬灯のごとく巡る思いに耽っていた。家族のことをはじめ、彼の人のこと、あの出来事、そして軍隊生活等々二十一年間の生涯は脳裏に刻み込まれ、はかない一生に別れを告げ瞑想に耽った。やがて夜も明けたであろうころに、扉が開き再度の詰問である。覚悟を決めた以上どうにでもなれと自暴自棄になった。腕組みをしたままの対応である。向こうも余り追及しないままジープに乗せられた。いよいよ冥土行きかと思ひ目を閉じていた。「ダワイ」という声に目を開けたら昨日のラーゲリであった。ソ連の初夜は牢獄であった。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

食事

食料の配給は一週間ごとにあり、その都度一週間分の献立表を作成して、ソ連軍司令部へ報告しなければならぬ。朝食は主として粥で、それも米でなく粟や高粱、豆類の混合粥だ。それに乾燥野菜の煮付けがつく。昼は小麦粉と粟粉を混合した粉で蒸しパンを作り（イースト菌を入れているがふくれない）、すましスープ一杯。夜は米、麦、粟などの混合飯に魚一切れ、カロリー計算はできなかったが、お話にならない粗末な食事でもうにもならない。これらはまだ良い方で、ある時は小豆の塩煮を一カ月間食べさせられたのには閉口した。よくぞ生きてこられたと思う。食うことしか考えない同僚たちは、我ら炊事係の行動を鵜の目鷹の目で見張っており、炊事班長の任務は大変であった。献立表により出来上がった食事は、毎食配給三十分前に小生が検食し、その後にソ連の軍医大尉である女医殿が検食する。女医さんのハラショの合図で食函に詰め、小隊ごとの炊事当番へ渡す。しばらくして個人への配給が終わったころ、舍内を一巡して、満遍なく

配給されたことを確認することも大事な仕事であった。

時には、炊事当番の同士からお目玉を頂戴することもあった。配給したご飯を各自の食器に盛りつけたのを見せられ、隣の小隊は山盛りあるのに、自分のところはこのとおり少ないではないか、とやられる。そんなはずはないと思い、念のため計量器で計ってみると同量である。よく点検して見たら炊事当番の悪知恵で、折角の飯を杓子で押えつけ少く見せかけているではないか。何とかして多く食べたい気持ちは分かるが、ここまで頭を使うとは情けない気持ちであった。

ある日のことスープ騒動が起こった。もともと配給の少ない食糧のこと、少しでも満腹感を与える工夫が炊事の任務でもある。今まで、すましスープだったのを、少し濁りがあれば重量感も出るような気がして、千人分のスープは約五百リットルの水でその中に糠混じりの白米一リットルを入れて作った。三十分ほどしたら米粒もふくれて、ややどんよりとした感じになる、そこに岩塩を入れ出来上がりである。一人前にすれば約〇・五リットルの中に米粒が四粒か五粒しか入らな

い計算になる。配給のときには攪拌して米粒を均等に
したはずだけど、正確には配分することは困難である。
杓子運もあり、いろいろあるだろうと思っていた矢先
炊事当番の同僚から、炊事班長見ろの一喝があった。
よく見れば六粒程度の班と三粒くらいの差があった。
不公平だからやり直せと言うのだ。しかし米粒をいち
いち計算することは至難の業だ。米一粒を欲しがる貧
食は確かであるが、皆の理解を得て容赦してもらった。
衣食足って礼節を知るというが、せめて腹六分目く
らいは欲しいと思うけど意のままにならず、せめて一
回でも満腹感が欲しいということで、じゃんけんをし
て二食分のパンを食い翌日は昼寝をして我慢していた
連中もあり、何とも言えない悲痛な思いだった。

真夜中の出来事

一日の作業に疲れて、深い眠りに入っている夜中の
零時ごろのこと、「タワリッシ井上起きろ」の大声に
目を覚まし、目をこすりながら炊事場まで行ってみる
と、衛兵の任務についている日ごろ仲良しで腕相撲や
角力をして一時を過ごしているミラノフ軍曹が、勤務

中のことマンドリン銃を抱えて立っていた。彼はいか
にもせわしい態度で「腹が減ったからパンと肉をくれ」
とせがみこんだ。私も突然の話に不審に思い、それに
寝ぼけも手伝って、何事かと聞き返した。しかし彼は
「早く出せ」とせきたてるのみだ。このミラノフ軍曹
とは立場を超えた感じの付き合いでもあった。

しかし、今はこの申入れを聞くわけにはならない。
毅然として「この食糧は全て日本人のものであり、
ソ連兵にやるものは一つもない、いくら親しい友達で
も、やるわけにならない、これだけは駄目だ」と断っ
た。ところが彼は急に銃を私に向けて「くれなかった
ら撃つぞ」と言うのである。「俺は日本人だ、撃たれ
てもやらない」と強い姿勢に出た。

すると、まさかと思っていたのに、途端にマンドリ
ン連発自動小銃を足許に向けて一発、続いて天井に向
けて一発、ポンポンと二発撃ってきた。これは大変だ
と、咄嗟に無我夢中でミラノフ軍曹の胸ぐらへ飛び込
み大格闘となった。負けてなるものかと、まさに死に
もの狂いである。負ければそれこそ一発でおしまいだ。

平素角力の経験もあり、どうにか背負い投げで押さえつけることに成功した。しかし相手は何といつても六尺豊かな大男である。渾身の力を振り注ぎ奮闘しているけど内心不安もあった。だれかが応援に来てくれないかと周囲を見たが、同僚たちは疲れているせいかもしれないと起きてこない。いかにすべきかと思案したが適当なロシア語を知らない。そうこうしているところへ、銃声を聞いて駆けつけたのが日常對話しているソ連ゲーペーウの曹長だった。彼は下積みになっているミラノフ軍曹に「どうしたのだ」と問いかけた。「腹が減ったので食物を欲求した」と正直に答えた。「井上そのとおりか」と問われ、「そのとおりですが撃ってきたので応戦した」と締めつけた手もゆるめずに説明した。

曹長は軍曹に向かって間違いないと念を押して、「よし分かった、井上、手を離せ、ミラノフ軍曹こちらへこい、井上はもうよいから休め」と言って激闘の一幕はやっと終わった。しかし興奮は静まらず、眠ることもできずに朝まで、うとうとと悪夢の連続であった。

それから一週間ほど経ったある日の昼ごろのこと

あった。五十人ばかりの囚人たちが港の方へ作業に行く姿を、いつものことで気にすることなくぼんやりと立って見ていた。するとその集団の中から大きな声で「オーイ、タワリッシ井上」と呼ぶ者がいる。あれと思ひ集団の方を見ると、囚人服に身をつつんだ一人の男が右手を高く掲げて「井上、七年のチョロマだ」と言った。そして更に両手を掲げて七本の指を示した。なんとこの男こそ紛れもなく先夜のミラノフ軍曹である。何とも言えない感じだったが、彼の健在を祈りながら、頑張れよと見送ってやった。以来、帰国するまで再び会うことはなかった。ソ連の懲罰制度はどうなっているのか見習うこともあるような気がした。

ソ連兵の任務

五五三労働大隊は、我ら幹部候補生の若者を中心に、師崎隊長以下約千名で編成され、ウラジオストクの漁港関係の作業に従事した。ここウラジオ港では、北洋で捕れた魚を満載した漁船から荷揚げをし、サケ、マスに分類しながら箱詰め、樽詰めにして貨車へ積み込む作業。更にカニ缶詰製造、箱詰め、また箱作り等

一連の作業がほとんどであった。食料事情や生活環境の悪い中であって、労働のノルマが課せられており、一般的には百分の消化は難しかったが、我ら五五三労働大隊は若さとやる気に溢れていて百五十か二百%近くのノルマを稼ぎ、漁業関係者はもとより、市民からも喜ばれ、全抑留者の模範とされていた。

ソ連の抑留者取扱要領では、一作業で六カ月以上滞在することはできないと聞いている。一般的には六カ月ごとに移動させられ、一カ所に落ち着くことは少ないと言われていた。理由は明らかではないが、長期になると秘密が漏洩することをおそれることだと聞いている。我々の隊にも半年ごとに移動命令が出たが、作業成績優秀であるとの由でソ連の隊長自らモスクワの本部まで出向き移動中止となり、ついに我々はウラジオの主となってしまった。

酷寒の港は海面に一メートルぐいの厚い氷が張り、人畜は勿論、車両でも作業ができるほどだ。一日の作業を終えて帰るときには人員の点呼が行われる。引率監視のソ連兵の重要な任務は、日本兵の逃亡を防止す

ることである。五列縦隊に整列させ、アジン、ドヴァーと数え、人員を掌握しようとするのだが、我々はわざと時間をかける作戦に出た。

元々、我ら日本兵は四列縦隊である。ソ連兵は四列つまり四人ずつでは勘定ができないほどの教育しか受けていない（将校は別であり、英才教育は徹底している）。どうしても五列に並べと言う。いや日本兵は四列しかならつてないのでと時間つぶしに懸命だ。理由は、人員点呼に手間どり身体検査を入念にさせない作戦である。防寒服に身を包み、大きな手袋にはカニ缶を左右一個ずつ、腹巻き代りに塩鮭一本が腹帯（バンド）の下へ隠されているのだった。寒さのみぎりではあるが背に腹はかえられぬとはこのことでしょうか、時間いっぱいギリギリまで人員点呼に手間どらせ、服装検査は「ダワイダワイ」でチョン。

まつ毛にツララが下がり、野小使が箸状になる厳寒期が過ぎ遅い春がやって来たころには、作業にも慣れ、皆の気持ちも半ば諦めが手伝って少し落ち着きが見えだした。そのうち労働の合間には民主運動が芽生えて、

随所で批判会なるものが横行し、今までの指導者が次々と降ろされ交代した。また各種のサークルなどの催しもやるようになった。このようにして抑留も長期戦の構えになり、いささか閉口した。このような雰囲気をつくらせたソ連政治部の影響は大きく、今更ながら恐怖を感じた。

このようにして我が五五三労働大隊は民主運動の定着とハラショラポーターで、模範収容所ということになり、モスクワの本部より中将の現地視察が行われることとなった。我ら一同は、舎内を整理整頓して視察に備え、幹部一同は衛門前に整列、出迎えることになった。

やがて予定の時刻になって道路上に中将の姿が見えた。緊張していた我々も敬礼をする寸前、ソ連衛兵の「ストイ」の停止命令が出た。突然の大声に驚き何事かと目を見張った。今までぼんやりと椅子に腰掛け、マンドリンを横に抱えていたウズベク出身の小柄な一等兵である。中将に銃を向けて「俺は門衛兵だ、中将がラーゲルに来ることは聞いていない。許可なく勝手

に通れば射殺する」と言うのである。さすがの中尉も戸惑いながら若干の説明をしたが、その衛兵は頑として聞き入れない。ついに将官も退却し、手続をとって三十分くらい経ったあと無事に収容所の視察を行うことができた。日本の軍隊と比較して大変な違いだ。任務遂行のためにはどうあるべきか、良い勉強になったと思う。

休憩のひととき

港町の工場では、日本人労働者を含めて、午前、午後の一回ずつ十五分間の休憩がある。気候の良い春から秋までは大半の労働者は戸外に出て、グループごとにバレーボールのトスやダンスを楽しむのが習わしのようだ。我々もバレーボールには遠慮なく参加するが、ダンスはいささか苦手で躊躇していると、「タワリッシ、イジスター」の大声をかけ、手招きしているのは、ビヤ樽タイプのおばちゃんではないか。着ている作業服といえば、ギラギラに油がにじみ、まるで防水服のようだ。長靴を履き、腕まくりしている姿は、どう見てもダンスのタイプではない。それでもおばちゃん、

強引に連れ込み指導してくれるのだった。相手の動くままについて踊っている当方の姿も見られたものではない、十五分間のお付き合いは、仕事以上につらい思いだった。

夏には港内で水泳をした。久しぶりの泳ぎではしゃぎ、我を忘れて沖の方へ泳いで行った。すると、口笛をピーピーと鳴らしながらダモイの合図だ。休憩時間はまだ十分にあるのに、不思議に思いながら折り返した。何か用事でもできたのか、と聞いたら「日本の国はウラジオの海と続いている。ヤポンスキーは水泳が強く、もしかすれば、そのまま泳いで日本へ帰るかもしれない」と言うのである。いくら上手でも無理な話だが、海に囲まれている日本の水泳には一目おいていたようだ。オリンピックの活躍に期待するところ大である。

ある日、収容所内に鉄棒を作る話が持ち上った。ソ連の監視の兵隊と一緒に二連の鉄棒を作った。ソ連兵はみんな不器用で尻上りがようやくできる程度である。私も久しぶりのことなので思うようにできなかった

たが、大車輪をまがりなりに成功させ、拍手喝采を受けた。ソ連の隊長の言うことには「ソ連人は尻上りもできない。君は仕事をしなくてもよいから、一日中铁棒をやり、ソ連兵を指導してくれ」。とんでもない話で即座に断った。そのとき、ソ連の英才教育のことを聞かされ、なるほどと思った。

【執筆者の紹介】

現住所 鳥取県米子市東福原町六丁目一四の四五
生年月日 大正十四年二月八日生

昭和十六年十二月 鳥取県立米子商蚕学校卒

大東亜戦争勃発により繰上げ卒業

昭和十七年二月 国鉄後藤工場勤務

昭和十九年九月 現役兵として鳥取連隊入隊

その後、北朝鮮咸興に転属となり、平壤朝鮮軍管区教育隊に入隊、終戦となり、平壤近くで約一年間ソ連に抑留され、昭和二十三年八月三十日舞鶴に引き揚げた

昭和二十四年

国鉄を退職、家業の農業に従事、

兄が戦死のため家業を継ぐ。

(東京都 堀口 卓也)

事實は小説よりも奇なり

熊本県 畠田 完

出生から入隊

大正十四年九月十二日、熊本県下益城郡当尾村(現松橋町)に生を受け、当尾小学校、県立宇土中学校を昭和十八年卒業。受験に失敗、一年浪人の苦しみを味わい、十九年慶大に進み、同年末現役入隊を前に退学する。

父(正記)は朝鮮の郡山で鉄工所を経営、まあまあの業績をあげていたようだが、中小企業のため、昭和初期の不況の波に抗しきれず、倒産の憂き目に遭う。

母(陽)は運悪く結核に罹り、昭和五年二十五歳の若さで他界した。当時五歳で何も覚えていない。運命の

いたずらとして心に深く受け止めている。

幸いにも母の父、いうならば祖父が当尾村で医院を開業しており、私と妹(玲子)は祖父母(高橋貞雄・ツク)の家で育てられた。ちなみに父は数年して母の妹(厚)を娶り再婚、満州新京(現長春)にて国策に則り新天地を求めていた。

昭和十二年、日支事変が始まり、連戦連勝のニュースを新聞、ラジオで聴き、幼い胸のうちをときめかしていた。

祖父は明治三十七、八年の日露戦争に軍医中尉として従軍、満州国旅順、大連の奥に駐屯し、野戦病院で死傷者の手当てに当たっていた。話によると、毎日毎日、死者は勿論のこと、負傷者が担ぎ込まれ、重傷者は応急手当をし後方病院に送られ、軽傷者は傷がよくなるのを待って前線へ送り返されて行く。銃弾、剣による傷が多く、処置が遅れ傷口に蛆がわいている者、盲貫銃創で苦しんでいる者、手、足が砲弾の破片で吹き飛ばされている者、いろんな症状があるが、麻酔をかけるわけでもなく悲鳴の中に埋もれて、息つく暇も